

最初の曙光が喬家の邸宅に差しこんだ時、曹氏は一晚中眠れなかつた目をこすり、部屋の外に出た。庭には青い有蓋馬車が停まっており、四十がらみの下僕の長順がうやうやしく傍らに待っていた。早朝の大気は朝露のように清々しいながらもずっしりと重く花卉に墜ち、曹氏は新鮮な空気を胸一杯に吸い込むと、下僕に指示して馬車に荷を積み込ませ始めた。

「載せるべき物はみんな載せてちょうだい。食べ物着る物、文房四宝、それからいつも読んでいる本もお願ひ。そうだわ、太原府の大徳興の支店の曲番頭宛の手紙、数日前に送ったかしら？」

長順は荷物を運ぶ手を休めずに答えた。

「大奥様、送りました。曲番頭さんのところからお返事も頂いております。若旦那様の顎足の手配は全て整っております。奥様も旦那様もどうぞご安心ください」

曹氏は小さくうなずき、杏児が目を細めるとなだめるように言った。

「大奥様、若旦那様は合格なさるかもしれませんがね。そうなたら、うちからも挙人（郷試合格者。二次試験である進士の受験資格を持つ）が出ることになるんですから、もう二門の達慶様に遅れをとることもありませんね！」

曹氏は小さく笑ってため息をついた。

「合格したら、喬家三門から初めて挙人が出ることになるけれど、あちらはもう五人も挙人を出していらつしやるのよ」

そこでふと、なにか胸騒ぎがして、杏児を振り返った。

「杏児、もうこんな時間なのに、若旦那様はどうしたの？ まさかまだ眠っているのではないでしょうね？ だれが若旦那様のお供をするの？ 長栓、長栓——」

杏児は口元を覆って笑いだした。曹氏は眉をひそめた。

「なにを笑っているの？」

杏児はうつむいて真顔になった。

「大奥様、若旦那様はいつも眠ったら起きやしませんけど、今日は一生の功名に関わる郷試の日ですもの、まさかいつものようなことはありませんよ」

曹氏はフンと鼻を鳴らすと、何か言いかけたことを呑み込んだ。

「いいわ、長栓はどうして姿が見えないの？ もうこんな時間よ！ 杏児、長順、おまえたちで手分けして母屋と書斎を捜して来てちょうだい、急いで！」

二人が急いで捜しに行くと、入れ替わりにあたふたと駆け込んだ張媽が叫んだ。

「大奥様、早くいらしてください、大旦那様が起きて若旦那様を見送るとおっしゃって聞かないです！」

曹氏はぎよつとして次の門に駆け込んだ。

精緻にしつらえた奥の部屋では、重い病の喬致広が寝台の上で起きあがろうとしていた。

「だれか手を貸せ、起きるぞ——」

曹氏は急いで歩み寄ると張媽から薬碗を受け取った。

「あなた、横になってください、まずお薬をお飲みになって」

致広はそれを押しのけた。

「いらん、そんなもの飲まんぞ」

「あなた——」

たちまち曹氏の目に涙が盛り上がり、声が震える。

気が引けた致広は、目を閉じると抗うのをやめた。弟の致庸によく似た容貌だったが、致広の方がずっと貫禄がある。一挙一動に大商人の威厳があったが、しかし大病を患ったいま、その風貌は見る影もなく衰えていた。

曹氏は目に涙をたたえて夫に薬を飲ませたが、しかし致広は数口飲むとむせて吐き出してしまった。寝台に倒れ、目を閉じて口を大きくあけせいぜいと喘いでいる。曹氏はぎよつとして

杏児に医者を呼んで来させようとしたが、致広は半身を起こし苦しむつもきっぱりと言った。

「いらん、手を……手を貸して座らせてくれ」

曹氏は少しためらったものの、仕方なく杏児と一緒に夫の身体を支えて座らせた。

致広は目を閉じてしばし息を整えると、目を開けて半ば喘ぎ声で尋ねた。

「曹番頭は夜に来たのか？」

曹氏はうなずき、言いかけた言葉を再び呑み込むと、杏児に座を外すよう手振りで示した。

致広は苦勞して頭を起こすと、曹氏の方から話したすのをじっと待った。曹氏はあまりの辛さに顔をそむけて低い声で言った。

「包頭からまだ報せがないのです。ですがどうかお焦りにならぬよう」

致広は微動だにできなかったが、手は無意識のうちにそばに置いてあった嗅ぎ煙草の壺を掴み、いらだたしげに握りつぶしてしまった。曹氏はぎよつとなったが内心の動揺をおくびにも出さず、壺のかけらを片づけながらなだめた。

「あなた、手にお怪我なさいませんように。やはり横になっていらしてください。その方が少しはお楽でしょう」

致広はかぶりを振ると、なにか気が紛れる話をしようとした。

「致庸は今日、太原府に郷試を受けに行くのだろうか？ もう準備は全て整っているのかね？」

「整っております、ご安心ください」

曹氏は慌ててうなずいたが、さすがに堪えきれなくなり、さっと背を向けると悲しみがこみ上げてきた。致広はそれに気づかず、わざと楽しげに言った。

「致庸が今日癸ち三度の試験をやり遂げれば、われら喬家三門から挙人が出ることになる。そうしたら来年は都に行つて進士の試験を受ける資格が得られる。ついに我が家からも役人が出ることになるというわけだ！」

曹氏はふと気になつて涙をしのんで尋ねた。

「あなた、致庸は……今回ほんとうに合格できるとお思いですか？」

致広は深く息を吸い込むと、さりとつと言つた。

「できるとも。弟のことはわたしが一番わかっている。あいつが日頃八股文（科挙の答案に用いられた文体）など眼中にないことなどどうでもいい。弟は小さいころから普通の者とは違つていた。ほかの人間は役人になるためにやむを得ず本を読むが、弟は本が好きだから読むのだ。致庸はわが喬家三門から出た最初の読書人だ。もしあれが挙人や進士になれないとしたら、天下に挙人や進士にふさわしい人間などいるものか」

曹氏は長いこと黙っていたが、いきなり口を開いた。

「あなた、致庸が読書好きなことに間違いありませんが、でもあなたもご存知でしょう、あの科挙になどこれっぽっちも興味がありません。ましてや役人になろうなんてちつとも思つてやしません。だつていつも言つてますから。立派な読書人の身でありながら、ひたすら科挙に合格して何かの役人になろうと考えるなんて、自分で自分を縛るようなものだ、楽しい日々を見逃して、天下で最も不自由な身分になるだけだ、と。それに、役人なんてこの世で一番の馬鹿者だと罵つています。致庸には科挙に合格する意志などないのだと思います。いつだって他人になんと言われようと自分のやり方を通す人ですから……」

致広はふいに不機嫌になつた。

「おまえは一体なにが言いたいんだ？」

曹氏は齒を食いしげると、言い出した以上はと続けた。

「わたしが申し上げたいのは、致庸は本店の坊ちゃんに生まれついて、自由きままに日々を過ごすのに慣れていてということですよ。太原府に郷試を受けに行きたいなんて少しも思つていないのです……あなたはご病氣だし、包頭のことでだつてまだ確かな回答が得られていないのですよ。わたしが申し上げたいのは、今回の太原の郷試……行かせなくてもいいのではないかと」

致広は激怒して喘いだ。

「だ、だめだ！ たとえ天が墜ちて来ようと、今日は太原府の郷試を受けに行くのだ！」

曹氏は慌てて夫の胸や背中をさすりながら、言わなければよかったと思つた。

「あなた、怒らないでください。ちよつと言つてみただけで……」

致広はひとしきり咳き込むと顔をあげた。その目には涙が光っている。

「おまえは……おまえは忘れてしまったのか？ かつて両親はどのように死んだ？ うちに役人がいかなかったがために、御用商人に足蹴にされて、悔しさのあまり病氣になつて亡くなつてしまわれたんだぞ……わかっているよ。おまえは、包頭での商売で達盛昌の邸家に競り負けて、わたしが潰れるのを心配しているのだろう？ そうなつたときにこの家には支えになる男がいなくなるよ！ それは違うぞ……うちと邸家のどちらが勝つか、そんなことまだわからんじやないか。致庸は今日は絶対に太原府で郷試を受けるのだ！」

言い終わらぬうちに致広は大きく喘ぎ始め血の混じつた咳をした。曹氏はどつと跪くと、泣

きなながら叫んだ。

「あなた……」

致広は少しも動じず、喘ぎながら言った。

「立ちなさい！ おまえまでわたしの気持ちかわかんとはな！ ……弟は可哀想な子だ。両親が亡くなった時はまだ三歳だった。両親が弟の手をわたしに握らせて、兄を父と思え、嫂を母と思え、と言いつ聞かせたのを覚えているよ。だから、両親に免じて、致庸を殴りたくても叱るだけにし、怒鳴りつけたくても言い聞かせるだけにし、あれに自分は親がないのだとは思わせないようにしてきたんだ」

曹氏は声もなく泣いた。

「あなた、もうやめて……」

しかし致広は目をすえて話し続けた。

「いや、言わせてもらおう……両親を埋葬した日、喬致広は一つ心に刻んだのだ。致庸には両親こそいいかもしれないが、しかしわたしはあの子の兄だ、わたしが必ず幸せにしてみせる。一生幸せでいられるようにしてやる。決して父母のない子の悲しみを味あわせたりはしない！ 致庸は子どもころから商いが好きではなかった。だから商売ではなく学問をさせた。それだって無理矢理やらせたわけじゃない。わたしは心に決めていたからな。もしあの子が学問をいやがるなら、無理じいはほしくない。だが、そうじゃないようだ。弟は生まれつき学問の素質があった。だから学問をさせた。科挙の道を進ませたのだ。そうしないと、あの子の一生を誤ることになるかもしれないと思って。そんなことになったら弟に申し訳ない。それ以上に死ん

『第一章』

だ両親に申し訳が立たん！ わたしは……」

曹氏は齒を食いしばり急いで涙をぬぐった。

「あなた、お気持ちには十分わかりました。わたしが間違っておりました……わたしが案じているのは致庸自身のことです。あの莊子のような心のありようが心配なのです。科挙に合格する気がないために、万一試験でわざと不出来な答案を書いたりしたら、あなたのお気持ちが無駄になってしまうのではないかと」

致広は咳き込むのを止め、大きくひとつ喘ぐとじっと考え込んだ。

「おまえの言うことにも一理ある。しかしわたしはあれに本気で試験に取りくませる方法がある。そしたらきつと合格するさ」

曹氏は半信半疑だった。

「どのような方法でしようか？」

致広はまたひとしきり咳き込むと、手を振った。

「筆を持って来てくれ——」

曹氏が背を向けると咳混じりの致広の声が聞こえた。

「いいか、家のことや包頭パオトウのことは、一言も致庸に漏らすなよ。試験を受けに行くにしても、楽しい旅ができるようにな」

曹氏は振り返らなかった。糸の切れた真珠のようにハラハラと涙がこぼれ落ちた。